

## 時間のドア

時間のドアをあけると  
あのとこの秋風が  
澄んだ足音を立てながら  
山裾からおりてきた

風が運んできた手紙には  
海に向こう、山に向こうで  
いのちの炎を懸命に燃やす  
青紅葉の姿があった

ゆらゆらゆれる紅葉よ  
まだ散ってゆかないで  
海山どうしたら  
越えていけようか

すると、いつのまにか  
紅葉は輝きはじめ  
木々の間から  
こうこうと燃える焔を滲ませていた

遠くて近い  
時間の中で  
ずっと

待っていてくれたのだ  
灯りに手をのばす  
そのままそっと  
ここに置いて  
一緒にドアの外にでた

木村裕子